

ジェイムズ・ミルとアジア

——『英領インド史』におけるヒンドゥー・ムスリム両社会の分析から——

森まり子

はじめに

本稿は、ジェイムズ・ミル (James Mill, 1773～1836) の主著『The History of British India (以下『英領インド史』、一八一七年刊^①) におけるヒンドゥー・ムスリム両社会の分析に焦点を当て、功利主義思想家としての彼の、イギリスのアジア支配についての考え方の一端を考察しようとするものである。同書は刊行されるや否や大きな成功を収め、イギリスのインド支配に大きな影響を与えたと示唆する後世の評価もあるが、インド研究としては内容が古いたため今日では殆ど読まれていない。その様ないわば *obsolete* な資料を中東研究者がどの様な視角で考察するのかをまず明らかにしておくたい。

先頃私は、中東など非欧米地域に「民主主義」を押しつけつつ介入するアメリカの対外政策のあり方を「ウィルソン型外交」と称してその源流をウィルソン米大統領の外交に求め、更にその「ウィルソン型外交」の源流を探る事を念頭に、民主主義の「西欧的」起源を考察したが、その際に一九一九年のウィルソン大統領に主要な部分で影響を与えたと考えられる直近の思想家としてベンサムにふれた。それにあたって私の念頭にあったのが、ヴェルサイユ体制の失敗の原因となった欧米の合理主義者の思考様式が十八世紀の思考様式と変わらぬものであったという E・H・カーとモーゲンソーの指摘であった。その指摘を踏まえればベンサムのみならず、彼の思想の共鳴者であった J・ミルにもふれるべきであったが、紙幅の関係でそれができなかったため、補論の意味もあつて本稿では J・ミルを扱う事にしたのである。つまり本稿の隠れた関心は、二十世紀の

ウィルソン外交の精神につながる思想家としてＪ・ミルを見てみたいというものである。それと共に、本稿は西洋史として完結する関心よりはむしろ、欧米の民主主義国がどの様に自己正当化を行いつつアジア支配を深化させたのかという、先ほど述べたアメリカの中東政策のあり方にもつながる問題意識を底流に持っている事を強調しておきたい。Ｊ・ミルの『英領インド史』は詳細に書かれているだけにこの問題意識に関わる示唆的な内容を含んでいる。確かに同書はインド研究としては後世のものに凌駕され偏見も交じっているが、本稿の上記の視角からすると、偏見を含むミルの議論の立て方こそが正に、ウィルソンらに受け継がれた〈近代西欧のアジア認識〉の一つの祖型として考察の対象になり得よう。以上の関心から書かれたのが本稿である。

一、『英領インド史』の執筆の背景

まずＪ・ミルによる『英領インド史』の執筆の背景を、彼の思想、同書の執筆動機・意図・方法論、同書が書かれた時代状況の三部分に分けて概観しておきたい。

(一) Ｊ・ミルの思想

Ｊ・ミルはスコットランド出身であり、活躍の場を求めて一八〇二年にロンドンに出て来た。一八〇八年に、既に名声を博していたベンサムの知遇を得る。Ｊ・ミルはベンサムに比して形而上学的傾

向が強かったが、彼の民主主義への強い関心はベンサムに影響を与えたとき、ベンサムは定職がなく生活の苦しかったＪ・ミルとその家族を援助した。Ｊ・ミルは一八一九年に東インド会社に就職したが、それに先立ち一八〇六年から『英領インド史』の執筆を開始し、一八一七年にロンドンで出版した。一八〇六年は長男Ｊ・Ｓ・ミルが誕生した年でもあり、Ｊ・ミルはこの長男にギリシア古典をはじめとする英才教育を施す事になるが、ちょうどその間に貧困の中で同書の執筆に全力をあげていたのであった。同書は全三巻、大判で二一〇〇頁以上に及ぶ大部なものであり、執筆に十年以上かかった事になる。

同書執筆時のＪ・ミルの思想については子のＪ・Ｓ・ミルの自伝がその特徴を伝えている。それによると政治面では、Ｊ・ミルは「代議政体と言論の完全な自由という二つのことの効力にほとんど無限の信頼をお」き、「理性が人間の精神に働きかけることをゆるされさえすれば前者は必ず後者を動かし得るということを完全に信頼していた」。この様な理性と進歩への限らない信頼に基づいてＪ・ミルは「人類の知的道德的条件は教育によって無限に改良することが可能だ」という事を持説としていた。更に彼は物事の判断において感情的要素を徹底して排除した。「父の教えがまた感情を過小評価する傾向があった」と息子は回想する⁶⁾。

感情ではなく客観的資料という「証拠」に基づいて全て議論するというＪ・ミルの立場は、日常生活のみならず『英領インド史』でも一貫しており、彼がヒンドウの詩や芸術に大きな価値を認めぬ

叙述をしている事にもつながっている様に見える。また子のミルが後に父を含むベンサム派の〈理性への絶対的な信頼〉に懐疑的になったと述懐する次のくだりは、父のミルの思想的特徴を逆に浮かび上がらせる箇所にもなっている。「父の考える哲学的方法には、それを政治に適用するかぎりでは、私が従来想像していた以上のものと根本的にまちがったところがある、と考えざるを得なかった」。子のミルは、「あらゆる政治制度の問題は絶対的ではなく相対的である、人間はその進歩のいろいろの段階に應じて、それぞれが合った制度を単に持ちたがるというだけでなく、持つのが当然だということ」を後年信じるに至ったというが、これは逆に言えば父ミルが理論に偏りすぎ、理性に基づく「正しい」制度があらゆる場所に普遍的に適合するとは限らない現実盲目的な面があったという証言でもある。しかし、本稿では軽くふれるにとどめざるを得ないが、かく述べる子のミルが実際にはますます議会制民主主義への信念を強めたのに対し、父のミルはイギリスがインド支配において現地の実情にそぐわない方式を押しつける事の不適切さを『英領インド史』の中で説く（後述）という様に、必ずしも父のミルが現実政治において理論一辺倒でなかった点には注意すべきであろう。

『英領インド史』について子のミルは、ヒンドゥーの社会や文明が自分の思考に刺激を与え、「全篇を通じて、当時過激と見なされていた一種の急進的民主主義の見解なり判断の下し方なりがみなぎっている」と評し、「父の最大の著書の主題となったインドとの関係で、父がすべての健全な政治家精神の創造者となった」と述べて同書の

評価の高さにふれている。同書刊行から程ない一八一九年に東インド会社の通信連絡部門の補佐役の一人（後に審査部長）となった父ミルは仕事の合間を縫って哲学・経済学を自分に学ばせたと子のミルは回想するが、『英領インド史』における経済への目配りも、Ｊ・ミルがリカードを親友とするほど経済と効率性を重んじていた事を反映している（Ｊ・ミル自身にもリカード経済学を解説した『経済学要綱』という著作がある）。

子のミルが提示するＪ・ミルの人間像として最後に注意すべきは、Ｊ・ミルがヴォルテールがフランスでそうであった様に「英国の知的急進派の頭目であり指導者であった」にもかかわらず、「十八世紀最後の人」であり「十八世紀の思考なり感情なりの調子を十九世紀に持ちつづけた（むろん修正も改良も加えなかったのではないが）」ために、「全体として父の精神と現代の時代精神との間にはいちじるしい対立が見られ」、それ故にベンサムの名声に埋没してしまい「当然受けてよいだけに大きな」名声を得られなかった、と評している点である。父ミルが「現代」に立ち遅れた点とは、理性や合理性の多寡によって全ての価値判断をするという極端な知性主義（究極の功利主義）であったと思われる。この様なＪ・ミルの傾向を念頭におきつつ、彼の執筆の動機・意図・方法論を次に見ておきたい。

（二）『英領インド史』の執筆動機・意図・方法論

Ｊ・ミルは同書の前書きで、インド史を書いた直接的な動機とし

て「これまでイギリス社会に享受されてきたインドについての知識には特異なまでに欠陥があった」事と【xii】^⑩、東インド会社の社員でさえもインドについてかなり無知であったという事情を挙げている。駐在員は経験を積む前に任期が終わり、しかも勤務の事務的側面に多大な時間を費やすので研究時間が殆どなく、場当たりの情報収集に終始する【xx】^⑪。この様な状況の打破と、英国世論の間にあるインドへの誤解、特にインドには高度な文明があったとか、インドには莫大な富があるという言説を正す目的の為に同書を執筆した、とミルは述べている。

しかし、実はミルには啓蒙を超える政治的目的もあった。それは前書きには明確に書かれていないが、ヒンドゥーについての「一般的考察」の中で明示されている。彼はヒンドゥーの真の文明度を確かめる事は、興味の為のみならず、彼らの統治に携わる英国民にとっては最も高い実的な重要性を持つとする。人々の状態に適合していなければどんな統治計画も目的を達せられないからである。もし英国人や英国政府がヒンドゥーの文明を過大評価し、だが実際はそれ程でもなかったとしたら、ヒンドゥー統治の為にとられる措置のめざした目的自体が間違っているという事になるかも知れない【49】。この様な事態を防ぐ為に正しい判断材料を提供する事が自分の目的である、と述べたミルは、事実と理性に基づく東洋の分析の必要性を説く。その様な分析の為の彼の方法論が、俯瞰・分類・比較であった。

全篇を通じてJ・ミルの分析には、十七〜十九世紀にイギリスの

民主主義の深化と手を携えて強まった俯瞰・分類・比較という観点之余す所なく表れているのが大きな特徴である。入手できる限りの根拠資料をもとに感情的判断を排して「事実」を抽出し、個々の事実を知られている限りの類似の古今東西の事例と比較して、当該事実が世界的に見て普遍的であるか特殊であるかという世界史的位置づけを判断し、推論もできる限り理性に照らして行い、論理的結論を引き出す^⑫。その結論は当該事象が高度な文明の印なのか野蛮の印なのかという判断を伴っていた。ミルはこの様な方法論で書いた自著について、完全な論理性を持つて真実を書けたと自負しており、どっちつかずの結論で妥協しなかったのも「理性の権利」を裏切らない勇気でもって明快に論じる避けがたい義務があると信じたからだ、と述べている【xxiii】^⑬。しかし自然科学の発達に呼応するかの様なこの「明快な」アプローチが、インドの住民をヒンドゥーとムスリムに截然と二分し、両共同体の文明度の優劣或いは世界ランキングを恰も数直線上で可視化するかの様な作業を通して、明確で否定しようのないインドの「再定義」につながっている事も注目される。曖昧さを残さない分、その再定義は重要な政治的含意を持つたが、この点は最後に考える事としたい。

同書におけるミルのもう一つの基本的立場は、同書に頻出する「本性（本質）」「法則」「理性の権利」などの言葉から窺われる様に、理性に基づき社会を科学的に分析できるはずだという極めて十八世紀的な前提であった。すなわち、歴史という人間的な営みや異文化を「科学的な」理性の目で徹底的に理詰めで分析しようというので

ある。同書は「批判的歴史」の書であるとの自負を前書きで表明した彼は、同書における批判の種類は叙述への批判と証拠への批判の二種類であるとし、必要な論証はたとえ長くなっても省略せずに行っているとする。分析にあたり彼は現地体験の有用性も否定はしないものの、自分はインドに行った事がなく、東方の諸言語については極めて初歩的な知識しかないが、東インド会社の経営陣も同様の状態であったが特に問題にはなっていない、また現地体験がなく現地の言語を知らずに歴史を書いた成功例(タキトゥスの『ゲルマニア』等)もあるし、更にはヨーロッパ諸言語で集められた情報の蓄積がある事から、かなりの有用性(utility)を持つ著作を自分がインドについて著してもよいのではないかという結論に達した、と述べる【xiii】。

更に前書きによれば、社会にとつて有用なインドについての本を自分が書けると彼が考えた根拠は、個々人の観察能力は極めて限定されているので、広範な対象についての十分な知識を得るには多くの個人の観察を結合させねばならないという事にあった。彼は単なる観察や言語習得を、結合・区別・分類・判断・比較考量・推量・結論を引き出す事、つまり哲学する、精神的習慣と区別した。後者こそ歴史の原石から砂金を抽出する為の最も重要な能力なのであり、この能力を駆使して多くの人の知見を分析的に集積した本は、読者が現地に行つて見聞するよりも効率的に知識を得る事を可能にし、以て社会の知識の増大に貢献するはずだと彼は考えたのである。彼は多くの証言に基づく情報の方が、知覚に頼る部分的情報よりも信

憑性が高く正しい判断につながるとも述べている【xv】。

ミルによれば、概観は偏見を生みやすい。概観では多くを見落とすし、かつ都合のよいものに「快楽」を感じ都合の悪いものを「不快」故に素通りするため、客観的に判断し得ないからである。「インドにおける炯眼な目撃者になつた事がないままヨーロッパで：インド史の資料を消化しようと企てる人は、自分の前に証拠を提示する目撃者たちとの関係において裁判官と非常に似た状況におかれる。：証言の量が豊富であるこの様なケースでは：裁判官は自分の調査によつて、自分が情報を引き出した個人達のどの一人が所有しているよりも完全に正確な、それについての知見を獲得したと理解できないだろうか」【xvi-xvii】と彼は問う。彼によれば自分自身に現地体験がなくとも、現地体験のある人々から得た情報を総合すれば当の情報提供者たちよりも深く事柄の本質に迫る事ができるし、他方、感覚や諸言語の習得による事実の収集だけに専念する人生は、真の知識や精神の力の獲得及び歴史家の最も高い役割を果たす事と両立しない。歴史家の義務とは全ての対象物について原因・結果・自然の傾向の明確な識別を行う事にあり、従つて歴史家に本来に必要なのは人間の本性の法則、人間社会の原理、統治の仕組みの実際の作用についての深い理解である。自分としてはその様な資質を得る為に努力してきたので、この仕事を不完全でも行つた方がよいと考えた、というのが彼の説明であつた【xix-xx】。

この様に前書きには、先ほど私が彼の方法論として挙げた俯瞰・分類・比較、及び理性に基づき科学的に社会を分析できるといふ事

への信念が明確に表現されているが、とりわけ注目されるのが、正しい判断を形成するにあたって証言者の多数性（証言の量）を彼が強調している事である。これはミルが世論の無謬性を「完璧に主張した」論者であった事とも関係する。すなわち彼が主張したのは、

全ての人が理性を持ち個々に等しく均質的な存在である事を前提とすれば、一人一人の意見は間違いかも知れないが、集める意見の数が多ければ多い程全体として社会は正しい判断に導かれるという事であった¹⁵。多数者への彼のそのような深い信頼が、ベンサムの場合と同様彼の民主主義観の根幹をつくつていたのだが、その様な理性主義的かつ、数量偏重の見方が彼のアジア分析にも正に適用されている事に注目したい。意見の多数性を偏重する方法をとると、多くの証言者（実質的には殆どが西欧人）が一致して「野蛮」という意見であれば、その文化は「野蛮」と判断される事になる。ミルのこの様な方法論は、多くの証言者が一致して「偏見」を持っていたらどうなるかという証言の「質」の部分を等閑視しており、世論の無謬性という考え方につきまとう「もし世論、つまり多数者が間違った考えを持っていたらどうなるか」という民主主義の根源的問題にも通じるものである。この方法論は、歴史的には、十七世紀の西欧に出現した数量的世界観と深く関わっている（註3の拙稿参照）。

（三）『英領インド史』が書かれた時代状況

——東インド会社のインドへの浸透とオリエンタリスト——

J・ミルが参考文献として使用したヨーロッパ言語によるインド

関連文献の主要なものは、十八世紀後半のイギリスのオリエンタリストたちの手になるものであった。¹⁶以下ではそれらの関連文献の性格やそれらが書かれた事情も含めて、『英領インド史』が書かれた時代状況を見ておく事とする。

まず十八世紀後半はムガル帝国が衰退し、イギリス東インド会社がベンガルへの支配を強化した時期である。初代ベンガル総督となったヘースティングズ¹⁷は、インドに英国の法や制度を導入すべきであるという英国議会委員会の報告に対してインドの古代法典こそが準拠すべき法であるとの立場から、ベンガルで最も尊敬されていた十一人のバラモンを集め、一七三〇―一七五五年にかけてヒンドゥー法典の編纂を行った。この法典は一七七六年にロンドンで『ヒンドゥー法典』（*A Code of Gentoo Laws*）として刊行され、ヒンドゥー法としては最初にヨーロッパに紹介される書となった。しかしこの書は、集められたバラモンたちのベンガル語やヒンドゥースターニー語での説明をもとにサンスクリット語からベルシア語に訳されたものをナタニエル・ハルヘッドが英訳したもので、この様な翻訳の経緯と、参考にした法典自体に矛盾する内容が含まれていた為に、非常に分かりにくい翻訳書となった。更にこの書は、古代の法をインド社会で長期にわたって生じた変化や発展を無視して現代の法規範として復活させようとした試みの産物であったため、現実の裁判で使用するには問題が多かったのである。¹⁸

この様な状況を目にして、信頼できる新たなヒンドゥー法典の編纂を試みたのが東洋学の父と呼ばれるウィリアム・ジョーンズ（一

七四六（一七九四）であつた。彼はオックスフォード大学でギリシア語・ラテン語・ヘブライ語・アラビア語・ペルシア語を学んだが生活の為に弁護士となり、一七八三年に最高裁判事としてカルカットへ渡つた人物である。一七八四年に彼はベンガル・アジア協会を設立してサンスクリット語を学び始め、『マヌ法典』を英訳した。ジョーンズはハルヘッド訳に疑問を持って始めたヒンドゥー法典の編纂を生前に完成させられなかったが、その仕事はコールブルックによって引き継がれ完成された。このジョーンズが訳した『マヌ法典』と、ハルヘッド訳『ヒンドゥー法典』がJ・ミルの使用した主要参考文献なのである。しかし前述の様に後者には様々な問題があり、ミルが参考文献としたのがよかつたかは疑問である。ハルヘッド訳には『マヌ法典』にない極端な規定が含まれているが、後述する様にミルは、ヒンドゥー法の残酷さを例証するにあたつて、『マヌ法典』にはない規定をハルヘッド訳から探し出して引用している様に見える箇所があるからである。

又ミルはジョーンズ訳『マヌ法典』に重く依拠していた一方で、ヒンドゥーの古代文明へのジョーンズの手放しの賞賛には批判的であつたが（三（二）で後述）、ミルの批判には一理あつた事も記しておかねばならない。ジョーンズは古代ヒンドゥー法を絶対視しその後の変化を不純物と見なしていたため、古代ヒンドゥー文明の高度さは彼のその持論を支える自明の前提となつており、この点でジョーンズの説はイデオロギイ的だつたからである。しかしジョーンズは「オリエントを真向から敵であるときめつけ」る前時代のオ

リエンタリストと違つて「オリエントの文献資料を直接取り扱おう」と試み、かつオリエントに前時代の人々より共感的であらうとした十八世紀の新しいタイプのオリエンタリスト（彼以降ヨーロッパははるかに科学的にオリエントを認識するに至り「学問的オリエンタリズム」が出現する）であり、十九世紀にいよいよ盛んになる比較研究（言語学・宗教学・歴史学など）や、「科学的」知識としてのインド史や、インドの宗教に関する学問や、サンスクリット言語学の紛れもない先駆者であつた。従つてミルはジョーンズの説を批判したにもかかわらず、実際にはジョーンズの文献学的研究から知識と方法論（及び方法論の背後にある精神）の面で影響を受けており、彼と連続性があつた事は否定できないのである。

二、『英領インド史』の概要と射程、及び同書から引き出される論点

（一）『英領インド史』の概要と射程

本稿では『英領インド史』のうちヒンドゥーとムスリムを扱つた第一巻に焦点を当てるが、この部分の位置づけを明確にするため、同書の全体像を簡単に見ておく。

第一巻に含まれる Book I（二五二七—一七〇七）は、イギリスのインドとの交渉の始まりと進展を扱う。イギリス東インド会社の変容や、会社の現地及び本国との関わりが主要内容に含まれる。

ミルは現地の人々の性格と状況について充分説明する事が後の展開の理解に必要だとし、Book IIでヒンドゥー社会、Book IIIでムスリム社会の歴史を詳述する。インドでは主に「二つの人種」がいるとミルは説明し、一つは「ヒンドゥー人種」で「原住民」であり、もう一つは「マホメット教の人種」でヒンドゥーと比べると数の上では取るに足らないとしている【90】。ミルはムスリムを当時使われていたMahomedans（マホメット教徒）と呼んでいるが、本稿では引用を除きムスリムと表記する。

本稿の範囲外となるその後の同書の展開としては、東インド会社がいन्दでの特権を独占する様になった事を英国世論が批判し【II-222-223、235】次第に議会在東インド会社への統制を強めていく過程【II-257、287、292】や、英仏がそれぞれ現地指導者と合従連衡して抗争し、優勢となったイギリス東インド会社が内地に浸透していく過程【II-194-195】、特にベンガルにおける英国の覇権確立やマラーター勢力の動向などが豊富な資料に基づいて描かれている。又イギリス東インド会社の収賄やいन्द貧民への搾取【II-216-217、221】、ロヒラ戦争の時の様な現地住民への残虐行為が英国内で問題化し、東インド会社への規制に発展した経緯も詳述され、第二次マラーター戦争の終結する一八〇五年で分析は終わる。この様に同書は全体としては、ヒンドゥー・ムスリム両社会の分析を超える射程を持つ文献なのである。そこでここでは、本稿では論じないが本稿の考察に関わってくるその射程が示唆されている部分を、主に第二巻から幾つか抽出してみたい。例えば以下の点である。

(ア) インドは昔から貧困であったにもかかわらず、インドには莫大な富があるというイギリス人の思い込みがつくられたが、その原因はクライヴにある【II-260】。

(イ) ハイダル・アリー^②が擡頭したマイソール王国は、純粋なヒンドゥー地域の政治が野蛮である事を示す一例である【II-271-272】。

(ウ) イギリス人が英国法を絶対視し、それをそのままベンガルに適用した事がベンガルの混乱を招いた【II-298-300】。

(エ) イギリス東インド会社はインドを、現地住民には何をしてもうい無法地帯にしている。ブラックホール（カルカッタの監獄）【II-100-101】や、ロヒラ戦争（一七七四年）時の住民の虐殺がその例である【II-341-342、350-351】。

これらの点のうち（ア）と（イ）は次節に関わる参考情報であるが、（ウ）と（エ）は直接関わらないため後述する機会がないので、一言しておきたい。（ウ）はミルが理性の判断を普遍的に適用するという考え方を信奉していたにもかかわらず、現実の政策として、異文化地域に自国の法を現地の事情への考慮もなくそのまま適用する事を批判している箇所と見なす事ができ、冒頭で述べた「ウィルソン型外交」とは異なる視点をミルが持っていた事を窺わせる。「英国」を米国に、「ベンガル」をイラクやアフガニスタンに読み替えると、以下に引用するミルの批判は、十八-二十一世紀にわたる英米の政治的な思考や手法の連続性を荒削りながら浮かび上がらせる。

：非常に多くの英国人は英国法を、人間の本性自体の切迫した事情に適合した理性の純粹な抽出物と考えており、次の事に無知である。すなわち、かなりの部分について英国法が恣意的・技術的で、それが叶える事が意図されている一般的な目的にうまく適合しておらず、他の文明国で見出されるいかなる法体系よりも特異な点が多く、他の諸国民の状態への適應能力にも乏しいという事を。にもかかわらずこのシステム全体を、英国議會や英国内閣はそっくりそのままベンガルに移植したのだ。そして自分達はインドにおける司法行政を充分準備したと思ひ込んだのだ。しかしその英国法は——それは全般に、裁判官の思慮分別を導いたり気ままな言動を回避したりする為の定義も文言も持たないのだが——思想・行動様式・既存の権利の多様性によって全く異なる場合の規則もアナロジでも提示しなかった。そして管轄権を広げウェストミンスターの法廷の恣意的な形式への術学的で機械的なこだわりを満足させる目的で、原住民の権利を英国法に適合させる様に曲げるべくなされたその暴力的な努力は、以前の法と司法の力の不完全さからその全期間にわたって恐らく経験されたよりも多くの不正義と抑圧を生み出し、より多くの危機感を煽ったのだった【II—299—300】。

(エ)も、細かい状況は異なるが、二十一世紀初頭のイラク戦争やグアンタナモの「十八世紀英国版」とも言うべき実態を彷彿とさせる。イギリス本国で民主主義や人權の思想が深化する中で、植民地では

その価値観が適用されない、或いは適用させる様な強制力が存在しない（従って適用しなくても事実上許される）空間が広がっていた。ミルはその実態を資料に基づいて客観的に伝えると共に、普遍的理性と政治的良識という両方の観点から、英国人のダブル・スタンダードとも言うべき態度を批判したのである。

(二)『英領インド史』から引き出される論点

同書の全体像が見えてきたところで、ヒンドゥー・ムスリム両社会についてのミルの叙述の特徴を、本稿の論点（注目したい点）と絡めて予示しておきたい。

第一に、ヒンドゥー・ムスリム両社会を分析する際にミルが古今東西の例との包括的な「比較」を行った事である。それは彼が、見かけは多様でも「人間の性質は：社会の異なる段階を特徴づける主要な詳細については驚くほど統一性を持っている」【167】という普遍性に注目したからであった。彼は「宗教の普遍的な發展過程」にも言及し、それを基準にヒンドゥー教がどの位の發展段階にあるかを評価している【199—200】。つまり彼の俯瞰・比較という作業は、人間社会の普遍的發展過程という統一的な物差しで行われたのである。

第二に、彼がインド社会を、自明の事であるかの様にヒンドゥー社会とムスリム社会に「分類」し、他の宗教・言語集団には殆ど言及していない事、また両者を比較してムスリム社会の方に高い評価を与え、多数派のヒンドゥー社会は文明的に遅れ古代以来停滞した

野蛮な社会であると断じている事である (rude, barbarian の語が頻出する)。彼は古代ヒンドゥー法の規定をもとに「現在」のヒンドゥー社会を批判しており、中世など「間の時代」における社会や法の発展や変容を考慮せずに静態的な分析を行っているのである。

第三に、ヒンドゥー社会へのミルの評価の低さとも関連するが、彼がカースト制と社会 (特にヒンドゥー) の「専制」的構造を西欧的な平等概念や民主主義の観点から繰り返し批判している事、また特にヒンドゥーの社会・文化・宗教を無秩序で非効率的、非論理的でレベルが低く、様々な矛盾を含むものとして、多様な根拠を挙げつつ批判している事である。Utility の語の多用は、彼が社会を有用性・効率性の観点から「測定」していた事を示している。

第四に、十八世紀後半から十九世紀初頭の西欧知識人の世界認識の広さ (一種のグローバリズムが成立しており、ミル以外の同時代人も古今東西の文明や人々を比較している) と、東方認識を持つ人々の裾野の広がり (東洋学者のみならず数学者や経済学者もこぞって東方への見方を論じている)、更に東方文化の熱烈な賞賛者と J・ミルの様な懐疑派の併存と論争、といった同時代的状況が彼の叙述から浮かび上がる事である。俯瞰が押し進められて世界空間を「俯瞰」しやすくなった結果、その空間を「文明」と「野蛮」に改めて分類する発想が登場し、「古代文明」とは実はそうした世界空間を再定義する作業の過程で創り出された、すぐれて近代的な概念である様にも見えるのである。ミルはアジアの「古代文明」なるものはよく調べてみると裏付けがないとして、その存在を明快に否

定した。ミルのこの議論を読むと、今日の我々においても、幾つかの高度な「古代文明」が他と区別される形で世界に実在したと考えるのが学問的に適切なものかどうか、「古代文明」の一部は近代西欧に登場した上述の様な発想・想像力の発明であるという側面も否定できないのではないかとという根本的疑問が生じ、「古代文明圏」措定の客観的根拠について再考を迫られる。彼のヒンドゥー論とムスリム論は、実はそうした今日的な問題提起につながる要素をも含んでいるのである。

三、ヒンドゥー・ムスリム両社会の分析

前節の論点を念頭におきつつ、『英領インド史』におけるヒンドゥー・ムスリム両社会の分析部分を考察を挟みつつ見ていくが、巨視的な考察は最後の「考察・結び」に譲る。

(一) ヒンドゥー社会——各論——

《伝説・歴史》ミルはヒンドゥーの伝説は、不自然な出来事が途方もない年月の流れの中で並べられ、時系列的に結び付けられておらず自然や理性の限界を超えており、信じがたい作り話であるとしている。又アレクサンドロス of 侵略時のヒンドゥーは行動様式・社会・知識において近代ヨーロッパ人に発見された時のそれと同じであった事がギリシア人の著作から分かるとも述べる【98-101】。すなわちヒンドゥーは理性では理解できない伝説を持ち、古代から近

代まで進歩がない人々なのであった。途方もない時間概念という点では聖書の「創世記」も同じであるが、彼はその事には言及していない。

〈カースト〉彼は西欧的な平等の観点からカースト制を批判した。彼が古代の諸民族にも同様の身分制があった事を詳しく述べ、俯瞰・比較の視点を強く示している事も注目される。例えばアングロサクソンの古代国家や古代エジプトでも四階級に分かれており【108】、同様の制度は古代アッシリア帝国にも見られ、古い時代からアジアのほぼ全域で支配的であったと注記する【120】。

カーストに関する彼の説明や見解はジョーンズ訳『マヌ法典』とハルヘッド訳『ヒンドゥー法典』をもとに展開されている。バラモンは罪を犯しても生命や財産を脅かされないが、シュードラに対しては『マヌ法典』に差別的な扱いが定められている。これはミルの関心を最も引いた部分であった。シュードラと「上位カーストの女性との姦通は鉄の寝台の上で焼き殺される事によって償われる。はじめなシュードラへの貶めはこの世のあらゆる事にとどまらず、聖なる教育や、優越した権力から恩恵を受ける機会にまで及ぶ。バラモンはシュードラのある所ではヴェエダを決して読んではならない事になっている」。四カーストは基本的には固定されているが、生活の必要性が生じた時には変更可能だともミルは記す。但しバラモンはクシャトリヤやヴァイシヤにはなれるがシュードラまで下がってはならない。上のカーストにはなれないため、シュードラは最底辺のままである【114】。この様な階層性については他の部分で

も説明されている。

〈政治〉統治形態についてもミルは自国の民主主義の制度を基準に比較・分析しようとした。まず統治の頂点には王が立ち、諸侯は王に直属する。王は法により七人八人の大臣から成る評議会を選ぶ事になっているが、彼らは先祖が王の家来であった高貴な家系の出身者で、聖典に通曉し勇敢で武器の扱いに優れた人々である。王はそのメンバーに恒常的に相談するよう命じられているが、その方法は一一人に個別に相談し最終的に王自身が決めるというものである。宰相はバラモンでなければならず王は彼に相談する。王の大権・義務は国の防衛と司法である。ここでミルは、社会は最初の段階では指導者が裁判官でもあるが、社会が進歩するにつれ法の執行は別の部局に委ねられる様になる、しかしヒンドゥーはこの文明の段階に達しておらず、王による正義の執行は聖典の中で主要原則となっており、時代を経てもこの原始的な慣行には変化が導入されなかったと説明している【125、127】。

統治構造に関するミルの分析の基準となったのは、近代民主主義国家の三権分立であった。「統治権力は立法・司法・執行の三大部門から構成されるため、これら幾つかの権力がどの手の中に付託されているか、どのような状況によってそれらの行使が制御され修正されているかを問う事が必須である」。ヒンドゥー法は神からの完璧な指示と考えられているので、立法の為に残されている唯一の裁量の余地は聖典の「解釈」である。しかしバラモンは解釈の大権を握っているため、立法権は事実上専ら聖職者に属している。他方、

王は前述の様に形としては最高の裁判官であるにもかかわらず、常にバラモンを正義の執行における助言者として雇わざるを得ないので、いわばバラモンの決定を実行に移す執行官である。従つてバラモンは立法・司法権を持つ上に事実上執行権も握つており、王はバラモンの道具以上の者ではないという事になる。しかし王は武力と歳入を有しており、好意と贈り物の分配ができる立場なので、競争する人々の妬みや競争の存在がバラモンに対する王の大きな影響力につながっているという側面もある【130～132】。いずれにせよヒンドゥー社会では「三権分立」が実現していない故に専制につながっている、とミルは示唆するのであった。

〔法〕ヒンドゥー法についてミルは、分類の粗雑さ、残虐さと報復規定、証言の扱い方の不適切さ、文言と適用における不正確さ（恣意性）を理由に「半野蛮」と見なした。

まず分類の粗雑さであるが、ヒンドゥー法においては民法・刑法が混合しており、これより「粗雑で欠陥のある法の分類の試みを思いつくのは容易ではない」とミルは言う。法のもう一つの分類は人と物の区別で、ローマ法でも英国法でも基本原理である。この区別は英国法では過度に粗雑だが、それでもヒンドゥー法よりはるかにましだと彼は述べる。ヒンドゥー法における規程の並べ方にも論理性がないと彼は指摘する【134～135】。

次にヒンドゥー法の残虐さと報復規定であるが、ここでミルが念頭においたのはベンサム（註23）の監獄改革の主張であつたと思われる。ミルは残虐さと報復規定は野蛮な人々の法の特徴であるとし、古今東

西の例（ギリシア・ローマ初期、モーセ、エジプト人、中国、サクソンとゲルマンの法）と比較しつつ、ヒンドゥー法の残虐さの具体例をジョーンズ（註24）訳『マヌ法典』とハルヘッド（註25）訳『ヒンドゥー法典』に依拠して詳細に論じる。ジョーンズが「現地の権力によって実行されている残虐な手足切断は人類にとつて衝撃的である」と評したある。「全ての欺く者の中で最も有害なのは不正を行う金細工師である。王は剃刀で彼を細断する事を命ずべし」（第九章二九二節）。「妻が：彼女の主人に対して負っている義務を実際に破つたなら、王はよく人の訪れる場所で彼女を犬に貪り食わすべし。そして王はその姦通者をよく熱した鉄の寝台に寝かせ、その下から死刑執行人は絶えず薪を投げ込み、その罪深い恥知らずをそこで焼き殺すべし」（第八章三七一・三七二節）。報復についてもミルは古今東西の例との比較で相対化しようとし、ヘブライ法の「目には目を、齒には齒を」と同種の規定が古代ローマやエジプトにもあつた事を指摘する【150～153】。

証言の扱い方の不適切さについては、ミルは証言の扱い方が中途半端な状態を「半野蛮」と呼び、ヒンドゥー法はこの状態にあると指摘する。ミルによれば、本来なら全ての証言者が証言をとられ考慮されるはずだが、過度の正確さをめざすが包括性に欠ける（間違つた洗練）の時代には、問題の全体にはなく一部にのみ特定のルールを適用しがちである。ある階級が間違つた証言をする傾向にあると考へた裁判官は、その様な証言者の証言は決して受け入れら

れないと直ちに決めてしまう。しかし最良の証言者の証言がいつも充分な量得られるとは限らず、得られても相互に矛盾する事もあり、かつ最悪の証言者から最良の証言が得られる事もあるため、ある階級の人々を証言者から排除するのは不適切である。更に証言者にまつわる不正義もあると彼は指摘する。例えばある人が別の人を殺人、強盗、姦通で告発した場合、告発者はこれらの罪のうちどれか一つでも証明できればそれは訴え全体の証拠となる（ハルヘッド訳）。また証言者が証言してから七日以内に彼に不幸が起きた場合、この人は罰金を払わねばならない（『マヌ法典』第八章）。更に『マヌ法典』には「偽証の直接の奨励」（傍点原著者）が見られるが、世界のどこにもこれほど法的に愚かなものを示せそうにない、とミルは述べる。更にミルは神明裁判についても他地域と比較しつつ詳しく述べるが【165～168】、法の不合理性や残酷性についてのミルのこれらの記述においては、突出した例の少なからぬ部分がハルヘッド訳『ヒンドゥー法典』から取られており、『マヌ法典』に該当する規定がない例も散見される。この事は、ミルが「残虐」「半野蛮」という結論に適合しやすい箇所を、ハルヘッド訳から選択的に引用しただけであったのではないかという疑問を生じさせる。

文言と適用における不正確さ（恣意性）については、この点で問題のある英国法に比べてさえもヒンドゥー法には大きな欠点があるとミルは指摘する。彼によれば、法の本文において望ましい性質とは完全性と正確性である。後者について言うと、正確な定義の為に書く事が必要であるにもかかわらず近代ヨーロッパ諸国民は彼ら

の法のかんりの部分を不文律としてきたが、近代ヨーロッパでは不文律にまつわる不確実さは判例によって限定されてきた。この確実さの程度は、最初から定義があって生じる確実さと比べるとはるかに劣るが、ヒンドゥー法は文言が曖昧なので文言の正確さすらなく、また司法を執行する役割を果たす王は前例に制限されるにはあまりにも強力であった。故に司法が宣言する事は殆ど常に不確実で恣意的であった。更に司法手続きでは効率性、遅延しない事、トラブルがなく費用がかからない事が望ましいが、これらの点ではヒンドゥーのシステムは啓蒙的な国々よりはるかに優れている、と（皮肉をこめて）ミルは述べる。即決裁判で遅延は防げ、トラブルや費用も最小限に抑えられるからである【169～171】。

〈経済・税〉ミルは物価が固定されている事はヒンドゥーの文明が高いものではなかった証拠であるとしている【139】。ここでの彼の判断基準はアダム・スミスの唱える古典的な自由経済であった。ミルは徴税制度についても「望ましい性質」を示し、その普遍的な観点に沿って評価している【174～177】。ヒンドゥー社会が税を現物で取り立てる事にもふれるが、その際に古代メキシコ帝国、ペルシア、中国でも現物徴税であった事に注目している【196～197】。

〈宗教〉彼はヒンドゥー教を考えるにあたり、自然の中に神がいると考える原始的段階から始まり万物の起源を問う様になる、宗教の普遍的な発展過程に注目した。彼はヒンドゥー教はこの原始的段階を超えてかなりの進歩を遂げているとするが、『マヌ法典』中の宇宙論の部分では「これ」などの指示語が曖昧だと指摘する【201～

205】。ブラフマー神・ヴィシュヌ神・シヴァ神の領域の明確な区分もなく、全てが緩やかで曖昧で一貫性がなく、文言も時によって異なる意味になる。ミルはここで、ヒンドウーの「野生的な虚構は、理性的なるものという名前で勿体をつける生き物の真剣な言明というよりは、人間の形をした猿の戯れの気まぐれの様に見える」【215→216】という内容のヒュームの言を引く。この様な合理性の有無によってヒンドウー教の「文明度」を測る議論をミルは押し進める。

ミルはヒンドウー教の三つの神について論じ、この宗教の整合性のなさについて論証しようとする。まずブラフマーは創造者の男性形の名前であるが、ヒンドウー教徒はこれを一つの神の特異な呼称であるとしてきた。つまりブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァとは神の行為の特異な諸様式の名前にすぎないというのである。しかしミルはこの前提こそが「最大の「貫性のなさ」」だとする。「神の唯一性」という洗練された概念」をヒンドウー教徒が持っている様でありながら、唯一神の行動が三相で示されるとしか認識できていない事になってしまふからである。しかし実際にはヒンドウー文献はブラフマーが無意味な賛辞にすぎない事を示しており、ヒンドウー教には唯一神という「洗練された概念」はないという事が判明する。その証拠にシヴァもヴィシュヌもブラフマーと呼ばれている、と彼は述べる【230→231】。

その上でミルは、ヒンドウー教神話の寓意を解釈しようとしてもばかばかしすぎて無駄だという結論に達する。ジョーンズの様な東洋学者は純粋な一神教の証拠をどこにでも見出して感心しているが、

ミルは「我々自身の見解に合った意味をヒンドウー神話に、或いは他のいかなる神話にも枠組みとして付す」事によって「そこ从我々の気に入る至高の神学でも至高の哲学でもいかなるものでも形づくる」事は無意味だと考えるからである。野蛮な迷信を寓意的に解釈しようとする著名なインド学者の中には、キリスト教がその合理性や「洗練された礼拝」によって異教を洗練されたものにした様に、「マホメットのより合理的でシンプルな教義」がヒンドウー教を洗練されたものにしたと主張する人々がいるが【233→236】、ヒンドウー神話を寓意として解釈する事に反対するハルヘッドの意見にこそ自分は賛成だとミルは示唆する。ハルヘッドが反対しているのは、信徒はあくまで寓話としてではなく文字通り神の言葉だと考えて信仰しているのだから、聖典を寓意として解釈するという事は彼らの信仰に欠陥があると想定する事になるからだ、とミルは説明する【236註】。

更にミルはヒンドウー教の宇宙論は非科学的であり、この宗教は原始的の礼拝以外の何ものでもない主張した【237→238】。又彼はヒンドウー教が人間の生贄を認める点を野蛮として批判し【273】、山車にひかれる、妻が夫の葬儀の火で焼かれる（サティー）等の例を挙げ、「この野蛮な犠牲」をヒンドウーの立法者たちは奨励しがちであったとも記す。但し妻を焼く同様の慣習は北方諸民族と共通する事も注記し、俯瞰・比較ひいては相対化も試みている【275】。彼は道德についての知識が民族によってそれほど違わない事に注目する一方【277】、極端な厳正さと極端な道德的緩さを併せ持つ「未開

の民の宗教」の一般則にも注目している。彼にとつて、厳正さを求めるヒンドゥー教が他方で猥褻さを奨励している様に見える事は矛盾にはかならなかった。

この様な矛盾を批判するにあたって、ミルはバターソンと宣教師ウォードの文献を註で引用している【279～280】。ウォードはヒンドゥーを「地上で最も柔弱で腐敗した人々」と批判し、「結婚の誓約への忠実さはヒンドゥーの間では殆ど知られていない。両性の交渉は非理性的動物のそれに大変近い」とし、汚らしい対話にふけるかと思えば寡婦を焼き殺すバラモンの生活にふれ、宗教とは言えないという趣旨の批判をしている。「この異教のシステムは神の完全性についての純化された知識を伝えず、生きている間に神聖さへの動機を誰にも与えず、苦しめられている人に慰めを与えず、死にゆく人に希望を与えない。それどころかあらゆる悪徳を煽り、その支持者たちを極悪の罪の中に固まらせている」とウォードは述べる。逆に言えば、ミルやウォードといった当時の西欧の知識人にとって、宗教とは「神の完全性についての純化した知識や神聖さへの動機を与え、苦しむ人に慰めを、死にゆく人に希望を与える」ものでなくてはならなかった。この様なキリスト教のイメージに基づく（普遍的宗教のモデル）を基準にミルらはヒンドゥー教を非難したのであった。

牛をはじめとする動物の神聖視も、人間への苛酷な扱いと矛盾するとミルは指摘する。但し、彼はここでも俯瞰・比較・相対化を試みる。同様の神聖視は西インド諸島、古代エジプト、初期のギリシ

ア人・ローマ人の間でも見られ、「この種の四足動物への崇拜は、確かに日本からスカンディナヴィアまでの全ての偶像崇拜の諸民族に共通だった様である」。動物のこのような神聖視が命あるものへの感受性から来たのではない事は、同様の神聖視が見られる「諸民族の野蛮な性格からも、ヒンドゥースタンの働く動物が蒙る悪名高い過酷な扱いからも、爬虫類が熱心に世話され餌を与えられる一方で飢えや病気で絶命するまま放置される人間への冷淡さからも、明らかである」とミルは述べる。

更にミルは人間の魂の目的地についてのヒンドゥーの考え方、すなわち輪廻転生について説明する。この思想は世界的に古代からあるとする研究を引きつつ、何に生まれ変わるかは『マヌ法典』で細かく決まっているとし、この教義の弊害を指摘する。「どのヒンドゥーも自分の全行動は自分の運命の結果だと考えている。彼は恐らく自分の惨めな運命を嘆くが、闘う事なく諦めている」。そしてミルは、来世の報酬と罰の教義は人を徳高くする力を持たないというウォードの見解に暗に賛成するのである【281～286】。

〈女性〉東方諸民族の間では「女性の純潔性に過度の価値がおかれ、悪質な違反については残酷に罰せられ些細な行為でも罪となる（男が巡礼の場、森や茂み、川の合流点で人妻と話す事が姦通罪に問われるなど）」とミルは指摘する。低カーストの男が高カーストの女と犯す罪は最も恐るべきものとされ、カーストが離れる程（例えばシュードラの男とバラモンの女の姦通）罪が重くなると彼は記す【160～162】。

女性の状況は社会の発展段階を示す最も決定的な基準であるという観点から、ミルはヒンドゥー女性の地位について更に考察する。彼によるとアフリカや他の「野蛮な」諸部族、現在までのタタール人、カルデアやアラビアの古代の住民、非文明時代のヨーロッパ諸民族の間でも女性は家督相続から外されていた一方、女性自体は有用な財産でもあったので花嫁買取金という慣習があった。しかし「ヒンドゥーの間でより弱い性」「女性」に命じられているよりも厳しく屈辱的な依存の状態は容易には思いつけない。夫は常に神として妻に尊敬されねばならず、夫は妻を奴隷として売る事もできた。女性は人生の段階に応じて父・夫・子供に守られ、自由は全くなく体系的に教育を奪われている。離婚の殆ど無限の権利は夫の方にあり一方、「いかなる種類の野蛮な扱いも、放棄や売却ですら、その女性を主人への義務から決して放免する事はない。『マヌ法典』中には女性に祭りや記念日に飾りや衣服や食物を絶えず与える様にという規定があるが、これは尊敬と優しさの証拠ではなく、恒常的な貶めの裏返しだとミルは述べる。女性を閉じ込める習慣がヒンドゥー社会にもともとあったのか、それともムスリムとの接触の結果取り入れられたのかは分らないとされてきたが、イスラームの影響が及ばなかった地域や隔絶した地域にもこの習慣は見られるため、ヒンドゥーのもともとの習慣であったとミルは示唆する。また両性の交渉についてのヒンドゥー文献の表現は、猥褻すぎて書き表せないとも述べている【293〜303】。

〈ヒンドゥーの性格〉ミルは、ヒンドゥーは物腰が柔らかいので高

い文明を持つているとヨーロッパ人は考えがちだがそれは誤りだとし、目撃談を引用しつつ彼らはお世辞に長けている一方、他者の感情に鈍感で、他者が苦しんでも放置すると述べる。彼は「Conteur of the『インドからの手紙』(一七九〇年)」を次の様に引用して彼らの矛盾を指摘する。「彼らは自分達より劣った者として生まれた人々を、最も価値のない動物よりも更に下の生き物と見なしている。彼らは我々が鶏を殺すよりも少ない良心の咎めしか感じずに人の命を奪う。牛を打ったりしたら冒瀆だが、バラモンは自分が認定すれば人を処刑する」。しかしこの叙述を読んで今日の我々読者に思い浮かぶのは、ミルが批判の根拠としているところの、人間と動物を截然と区別して人間の命に圧倒的に重い価値をおく考え方は西洋の概念であって全ての文化圏に当てはまる普遍的価値観ではないのではないか、また人間と動物の区別が曖昧な文化圏では人が動物以下に扱われる事もあり得るのではないかという、つまるところ「何が普遍的で何が普遍的でないのか」という疑問であろう。

更にミルは、ヒンドゥーは人に冷たく、臆病、訴訟好き、無気力、怠惰だと記す。怠惰は気候のせいとされてきたが、マレー人・アラビア人・中国人が怠惰ではないところを見ると気候のせいではなく野蛮人の特徴なのだとは彼は遠回しに言う。また労働への動機づけがヒンドゥーの間になく事の原因として、ひどい政府に従属していて労働の果実が安泰ではない事を挙げている【304〜314】。

ヒンドゥーの性格について、ミルはイギリス人のインド関係者の豊富な証言を付録として付け、逐一紹介している。それらの証言と

は、一八〇一年にベンガル州知事が巡回裁判官と地区裁判官たちを対象に行ったイギリス統治下におかれた人々の状況に関する調査一七九七年にインド駐在経験の長いチャールズ・グラント^⑤が東インド会社取締役役に提示した分厚い論文「英国のアジア人臣民の間の社会状況についての観察——特に風紀とその改善手段に関する」(この論文は一八一三年に英下院の命令により印刷された)、ベンガルの判事補のアレクザンダー・フレイザー・タイトラーによる二巻本「インドの現在の政治的狀態に関する考察」(主に東インド会社の若手社員の指導マニュアルとして書かれた)、ヘースティンズ裁判の資料等であるが、それら全ての文書に含まれる数多くの関係者の証言が、ほぼ例外なく現地住民(上層から下層階級まで)の公德心とあらゆる道德の欠如(嘘が多く利己主義で迷信深く怠惰であり、強盗・殺人が頻発)を異口同音に告発している事は、地域を内在的観点から偏見なく見る事の重要性を自覚する今日の地域研究者の目から見ても衝撃的である^⑥。例えばグラントは「：騙す事、くすねる事、ごまかし、掴ませる事の習慣があまりにも普通なのでヒンドゥーは自分達が自然の悪を行っているものと見なしている様だ」と述べ、不和・憎悪・中傷等がはびこっていると、「他者への感受性の欠如はこの人々の大変顕著な特徴」と断言する。更にグラントはクライヴやヘースティンズらの言を引用し、このような人々の道德的墮落の原因として専制的統治、悪法、憎悪を煽るカースト制を挙げる。タイトラーは「バラモンの間には全般的な挙動の墮落、

それより低い階層では宗教的・道德的原則の完全な欠如が存在す

る」「彼らの女性に対して過酷で専制的」と証言する。ティンマス卿は次の様に述べる。「個人は殆ど名譽の感覚を持たず、この民は公德心が完全に欠けている。彼らは偽りが利点を伴う場合は嘘をつく事に微塵も良心の呵責を感じない。それでも、ヒンドゥー教徒もマホメット教徒も絶えず彼らの名譽と評判について語るが、彼らがそれによって意味しているのは世間に対して見せる外見以上のものでは殆どない。両者のうち後者の方がこの事により拘る」。「彼らが蒙り得る最大の不名誉は：我々が言うところの、破門される事だ。この罰は彼らの宗教の命令への違反、或いは同じ事なのだが彼らの聖職者の命令への違反に対して科される。嘘をつく事、窃盗、掠奪、強奪、殺人は社会からの追放に充分値する犯罪とは見なされていない」。「ヒンドゥーにあつては全てが自分自身に集中している。自分自身の興味が彼の案内人だ。野心は彼にあつては二番目の特性で、金への愛がこの情熱の源だ」。ヒンドゥーの動物への繊細さと人間への残酷さの矛盾を指摘する者もあり、例えば英国の芸術家・作家で東インド会社とも結び付きのあつたジェイムズ・フォルブズは主にグジャラートの人々についてこう語る。「：ヒンドゥーの性格も残酷さと復讐から自由ではない。専制的統治の強い影響力がヒンドゥーに忍耐を教え、彼らの想像力の冷たさが彼らにそれを世界のどの人々よりもよく実践する事を可能にしていると言われてきた。：しかし彼らはこういう事も知っている。その忍耐強いヒンドゥーが、虫の死にも身震いし、今言つた様な気分の静謐さを保つ彼らが、敵或いは敵と彼が見なす者に対して用意される最も残酷な拷問につ

いて同じ位冷静に思いめぐらす事ができるという事を。：ヒンドウスタン全土にわたって残虐さと抑圧は貪欲さの召使いだ」。約二十年間デカンの「原住民」と親密な接触を持ったフランスの宣教師デュボワはバラモンの極度の猜疑心と二枚舌、父母への尊敬の欠如、子供の情念を抑制する配慮の欠如、墮胎や嬰兒殺しの横行を指摘する。宣教師ウオードは、血を見るだけでも震え上がるヒンドウが数多くの血腥い儀式を行う矛盾を見て「これらのヒンドウは本当にそんなに情け深いだろうか」と疑問を呈する。瀕死の身内を川岸に引きずっていき冷酷に死ぬに任せ、自殺を推奨し（生き埋めや偶像を載せた車に自らひかれるなど）、我が子を殺し（ガンジスに捧げるなど）、寡婦を焼き殺すという残虐行為の中にはヒンドウ教に由来しているものもある、とウオードは指摘する【321～331】。

〈技術（工芸・建築・農業・手工業等）〉工芸では織物のみが完成度が高いというのがミルの評価であった。彼は『インカ皇統記』や多くの証言に基づいて比較しつつ、文明の達成度と建築物の立派さは連動しないと主張する。根拠としては例えば、ゴシック式の大聖堂は文明の比較的低い段階で建てられた事を挙げる。又彼は、ヒンドウがアーチの建設方法をムスリムの征服者から初めて学んだとも指摘する。彼はヒンドウスタンの織物が優れている理由として、人の必要性が最初に生じる部門であり、経験がものを言う部門でもあり、ヒンドウの活動的でない性格に合っていたという点を挙げ【337～342】。農業については粗雑さや非効率性を指摘し【346】、美術も社会の初期段階を超える水準にはないと述べる【354】。手工業

については殆どの面で「ヒンドウは中国人に劣る」というのが彼の評価であった【361】。

〈著述（文学・歴史・地理学・哲学等）〉ミルはヒンドウの著述全般が散文的で論理性がないと酷評する。「マハーバーラタ」と「ラーマヤナ」の「虚構」も「取るに足らず子供じみている」。そもそも「自然の正確な観察と全体の対称性が、洗練された人々の詩と呼ぶのに必要」と考えるミルにとっては、ヒンドウの詩はホメロスの詩とは比較にならなかった。「シヤクンタラー」についてもミルは凡庸な筋だとする。彼は想像力の飛翔は未開の人々に特有のものという研究者の言葉を引用し、ヨーロッパで言えば北欧の詩が、ヒンドウ、ペルシア人、アラビア人、その他の東方諸民族の詩に極めて似ているとする³³。但しペルシアとアラビアの詩がヒンドウの詩より高い水準である事は疑いない、と留保を付ける事も忘れなかった【363～372】。

ミルはヒンドウには歴史叙述はなく、あったとしても物語的な詩の形式をとっており「真実と本質」からかけ離れている【363】とする。それは、彼らが「未来への導きの為の過去の記録の価値が理解され始める、かの知的な成熟点に到達していなかった」からであった。ミルによればムスリムの征服以前のヒンドウスタンの歴史叙述はなく、それ以前の出来事についてはムスリムの著作に頼らねばならない。ジョーンズの様なサンスクリット学者は「マハーバーラタ」や「ラーマヤナ」を一種の歴史的記録として好意的に解釈するが、実際にはそれらは歴史的順番とは相入れない「奇怪な産物」

だとミルは述べる【374～375】。続いてミルはサンスクリット学者ウィルフォードの「ヒンドゥーの地理学、年代学、歴史の体系は全て同様に途方もなくばかっている」という言も引く。更に、ヒンドゥーは異なる分類の植物に同一名称を与えているというウィルフォードの指摘について、「実際、整理したり分類したりする事は…全ての時代においてヒンドゥーの精神文化を超えてきた試みである様に思われる」【378】とコメントしている。ここでヒンドゥーの分類概念の稚拙さが、彼らに対するミルの低評価の根拠の一つになっている事に注目したい。更に彼は『マヌ法典』の形而上学的な言葉は理性では理解できないと指摘し、この様な抽象性は高度な能力の証拠ではなく「未開で無知な時代の人間の精神状態の自然な結果」なのだと言明した【381～383】。

〈言語〉ヒンドゥー・アラビア人・トルコ人⁽³⁾の言語は複雑な文法を持ち、同一の物を表すのに幾つもの言葉があるとミルは指摘する。この様な欠点をギボンらヨーロッパの文人は言語の「完璧性」として賞賛してきたが、言語は簡潔性こそが大いなる有用性だとする言語学者もいるとして、その意見の方にミルは賛意を表明する。彼の考えによれば言語の完全性とはあらゆるものが一つだけ名称を持つ事であつて、重複は欠陥以外の何ものでもなく、正確さを損なわずに言語を簡潔にする事こそ重要であつた【391註】。ペルシア語やマレー語にも言及しつつ、彼は多くの無用な言葉や文法規則があるのは言語として洗練されていない証拠であり、サンスクリット語が詩に向いていて耳に心地よいというのは「文明の証拠」ではないと主

張する【390～393】。彼にとって言語の「文明度」を測る基準とは流麗さではなく、文法や名称における無駄のない合理性であつた。

〈物理学・数学・天文学〉ヒンドゥーのこれらの学問は論理性に欠け、稚拙であるとミルは論じた。『マヌ法典』における、光に水は由来する云々というのは単なる推測でしかなく、つながり・理性・確実性を全く無視しており哲学や科学というレベルのものではないとし、未開の精神によく見られる「問う事なくして決定する恣意的なスタイル」であると批判する。ミルはバラモンの天文学を賞賛してきた自国の学者を長々と批判し、本書で示された資料を注意深く考察すればヒンドゥーの無知と文明の低さ以外の結論はないとする。ここでミルはラプラスとアダム・スミスが、ヒンドゥーの天文学が実は他の学問分野と同様に稚拙な段階にあるという見解を示している事を紹介する【394～398】。インドの科学はより先進的な諸民族から取り入れられた可能性があり【399、401、403註】、数字の発明も文明の証拠にはならないと彼は述べ【405】、一般の教育水準の低さにもふれる【408～409】。

ここで注目されるのはミルが、民族の達成を見てその民族の文明度を測る際、それらの達成が向けられているところの目的が重要であり、有用性を目的としているか否かによってその民族の文明度が分かると主張した事である。「有用性 (Utility)」があらゆる追求の目的であるちようどその割合に応じて、我々はある民族を文明化されていると見なせるかも知れない。軽蔑すべき、或いは有害な目的にその発明の才が浪費されているちようどその割合に応じて…その

民族は野蛮だと呼んで差し支えない」。この基準から考えると、ヒンドゥーの天文学・数学は専ら占星術の為に発展したが、占星術は「考えられる全ての営みの中で最も非理性的なものの一つ」で「ある民族を最も間違ひなく野蛮だと示すものの一つ」【428】であるから占星術を目的としてこれらの分野を発展させたヒンドゥーは（その分野の内容如何を判断する以前に）野蛮である、と彼は結論したのであった。

（二）ヒンドゥー社会——総括——

ヒンドゥーについての「一般的考察」でミルは様々な民族との比較によつて、世界の中でのヒンドゥーの更に明確な文明的位置づけを試みる。ミルによれば、近代ヨーロッパ人で初めて包括的に東方諸民族と接触を持ったイエズス会の宣教師の報告は賞賛にあふれていたが、最近では事実の吟味によつて中国人の達成についての冷めた評価が出てきた【430註】。ヒンドゥスタンについても状況は似ており、観察者はムガル帝国の宮廷や建造物の壮麗さに圧倒されがちでジョーンズら東洋学者もアジアの文明の高さを過大評価したが、ギボンも含めてヨーロッパ人の「文明」理解には不正確さと変動があり、前進している全ての段階の民族（国民）に文明の語が適用されがちであった。しかし文明の尺度が形成されるのは正確な比較によつてであり、それに基づいて諸民族の相対的な位置が正確にマークされる。彼のこの様な議論は、十八世紀後半から十九世紀初頭のグローバル化の中で、世界を俯瞰・比較して一つの物差しの上で自

他の相対的位置づけを明確にするという、当時の西欧に現れた精神的態度を典型的な形で表している様に思われる。又ヨーロッパ人がヒンドゥーを賞賛しがちであった理由として、当時実態が知られ始めていた「アメリカの野蛮人たちと比較された」からだともミルは説明しているが【430、435】、これも「俯瞰・比較」という時代精神の点から示唆的である。

更にミルはヒンドゥーの実態は半野蛮状態である事が判明したが、それを救う仮説がすぐに現れ、かつて彼らは高い文明を持っていたが外国への従属によつて文明が停滞したという話がつくられたと述べる。注目されるのは、根拠のない（とミルが判断する）この様な話【436、437】がつくられた原因が、ムガル帝国によるヒンドゥスタンの征服が北方諸民族によるローマ帝国の圧倒と「愚かにも」同列視された事にあつた様だと彼が注記している事である。彼は次の様に論じる。——ムガル帝国による征服はタタール（モンゴルを指す）による中国支配（元朝）と比較し得るのであつて北方諸民族によるローマ帝国の圧倒の事例とではない。ムガルがヒンドゥーの宗教と制度を採用しなかつたのは、ヒンドゥー側が参入を認めなかつた事と、ムガルが既により啓蒙的な信仰を持っていたからである【438註】と。すなわちミルはヒンドゥーが高度な古代文明を持っていたといふのは根拠なき説であり、ムスリム征服者の方が高い文明を持っていたと結論しているのである。彼のこの議論は、（インドの莫大な富というのは幻想である）という彼の主張（後出）とも通じる。又ミルは一つの政府の下に統一される事が必ずしも文明の証拠ではな

い、ともいう。中華帝国・古代ペルシア王国・オスマン帝国・野蛮なロシア人も統一はされていたのだから、ヒンドゥーが統一されていたからと言って、彼らの間に今より高い文明がかつてあったという証拠にはならないのである【446】。

次いでミルはバラモン^{ブラモン}の専制について論じるが、ここでも彼は東洋の文明の高さを主張する学者を批判した。彼はヒンドゥーの専制と聖職者の政略^{プリーストックラフト}が法によって歯止めをかけられつつ相互に支え合っているというジョーンズの説の矛盾を指摘する。ミルによれば歯止めをかけた専制というのは専制ではなく、かつ聖職者自身が法の作成者・解釈者であり、両者が手を結んで人民に暴政を行っているのが実態だったからである。ミルはジョーンズがオスマン帝国についても、専制と聖職者の政略^{プリーストックラフト}がヒンドゥーの場合より更に厳しく歯止めをかけられていると論じている事にも疑問を呈した。オスマン帝国におけるそれら二つの弊害は明らかだと考えるミルにとって、ジョーンズの説は実態とかけ離れたものと映ったからである【452】。但し同じ専制でも、ヒンドゥーの場合の方がムスリムの場合より程度が甚だしいと考える点ではミルとジョーンズに意見の違いはなかった【457註】。

更にミルはムスリム征服者たちがインドで莫大な富を発見したという説を否定し、インドの大半の人々は貧困の中にあつたとして次の様に論じた。——金銀の玉座も貧困を否定する証拠とはならず、逆に貴金属を見せびらかすという願望こそが貧困や野蛮な時代の決定的な証拠と言える。アクバル帝時代に漸く金銀貨幣が鑄造されて

出回ったのであり、それ以前が銅銭であつた事は、金銀が豊富であつたという事があり得ない事を示している。富と文明の印が理解されなかつた時代の旅行者の表面的な観察は当てにならない。

以下ミルは、他の諸民族とヒンドゥーを比較する。彼によれば、総じて中世ヨーロッパの方が統治と法の制度ではヒンドゥーにはるかに優っていた。手工業（織物等）、優しさや弁論ではヨーロッパ人はヒンドゥーに劣っていたが、戦争技術・農業・男らしさや勇氣・誠実さの点ではヨーロッパの方が優っていたと彼は述べる。次に同じ文明段階にある（と彼が考える）他のアジア諸民族との比較であるが、ミルは、ヒンドゥーは中国人・ペルシア人・アラビア人（この三者はアジアの住民の大きな部分を占め、日本人・コーチシナ人・シャム人・ビルマ人・マレー人・チベット人はその従属民族である）とミルは位置づける）とほぼ同じ文明状態にあるとし、古代ペルシア人と同様にヒンドゥー社会も古代以来変化に乏しいとした。彼はアジアの諸民族の主要な習慣の類似性に注目し、中国に関するバロウの記述をもとにヒンドゥーと中国人は科学技術の進歩については同程度だとし、統治と法では中国の方が優つているとする。両者いづれにおいても科学より技術の進歩の方が著しかったが、機械の使用については両者共に単純・未開であり、美術についても顕著な類似性があるとも述べる。ミルは両者とも模倣は巧みだが発明に欠けていたというバロウの評価を引く。また両者とも不誠実で卑怯で情がなく、最高にうぬぼれていて他者に輕蔑的であり、人も家も不潔だとする。これに対して東南アジアの人々（コーチシナの中

国人・ビルマ人・アッサム人・シャム人」と文明に対しては、ミルは証言に基づいて高く評価している。

注目すべきは、ミルが結論として古代民族に対して低い評価を下し、専制下では文明が発達するはずないと示唆している事である。これは裏を返せば、民主主義の下でこそ文明は自由闊達に発達するという想定をミルが持っていたという事である。ミルは、古代エジプトの芸術も学問もギリシアがその後達成したものに比べると未完成であり、人間の知識の進歩という面から見て凡庸だというある人の見解を長々と引用し、次にアダム・スミスが古代の諸民族の高い達成度を否定している事を紹介するが、ミルが引用するスミスの言自体は次の様な慎重なものであった。——古代諸民族の中に科学の名に値する何かがあるか否か、アナキー^{モニメント}自体よりも破壊的な専制が哲学の成長を妨げたか否かという事は、証拠が欠如しているために正確には決めがたい、と。これに対してミルは次の様な趣旨のコメントで結んでいる。——この問題を疑念の状態においておく事すら妥協である。スミスが言う様に「専制は：人間精神の進歩にとって有害」なのだから、専制が支配的であった東方には古代文明など存在しなかったに決まっている。スミスは何故この様な自明の結論を下す事をためらうのか、と【462〜480】。

(三) ムスリム社会

ムスリム関連ではミルは、第一巻第四章でバーブルの征服からムガル帝国の終焉（と彼が認識している一七六〇年のシャー・アーラ

ム二世の即位）までの諸勢力の攻防を記録し、第五章でムスリム征服者の文明とヒンドゥーの文明を比較しているが、以下ではその第五章に注目する。中世のムスリムの科学の水準は高いものの彼らの最良の著述は翻訳かギリシア語の著述の引き写しであると評したミルであったが【379】、ムスリムは全体的には物事の分類、平等概念、法とその実践、歴史叙述等の点でヒンドゥーより優れているとする。ムスリム征服者は、彼らの文明の最高の状態にあったアラビア人やペルシア人と同じレベルであったとミルは記す。ミルによればムスリム支配の欠点は多々あるが、ヒンドゥー統治を普遍的に特徴づける欠点ほどではない。まずムスリムの間の物事の秩序はヒンドゥーのそれに優越しており、ムスリムの専制下では全ての人は平等に扱われ貴族や特権階級はなく、低い身分の者でも最高位まで日常的に上がれる能力主義である。統治の機能も恒常的に分業されている点で、個人が圧倒的な権力を持つヒンドゥー体制よりも優れている。又ムスリム征服者の男らしさや良識が、専制が野蛮に墮する事を防いでいた点もヒンドゥーと異なる。従ってヒンドゥーはムスリム統治から得るものが大きかった、とミルは述べる【628〜635】。次にミルは法について比較するが、結論としてはヨーロッパ法・ムスリム法・ヒンドゥー法の順に優劣がつけられるのであった。ムガル帝国のムスリム法には確かに欠点はあるが、ローマ法や英国法と実際に比べると、英国法やローマ法を賞賛しがちである人々が信じているほどその劣等性は顕著でない事が分かる、とミルは述べる。特権などには全民族に文明の全段階で一致しているものがあり、権

利を保証する方式が異なっているだけという事がある。例えば個人の権利の正確な定義を与える事や法の形式・分類の仕方においてはローマ法・英国法・ムスリム法に大きな差はない。但しムスリム法がキリスト教徒の法体系と比べてどの位劣り、ヒンドゥー法をどの位超えているかについてはここでは論じ得ない、とミルは言う【639】。

刑法についてはムスリム法はヒンドゥー法に近く、死刑が殺人罪に限定され財産に対する罪には適用されないという点で、近代西洋法、特に英国刑法の残酷さを回避できていると彼は見る。ムスリム法の注釈書の訳者チャールズ・ハミルトンによると、ムスリム法廷は生命に関わらぬ全てのケースにおいて、コーラン（クルアーン）の言葉を実際の報復をするという字義通りの意味ではなく、傷害に対する正確な割合での償いをさせるものと解釈しているそうだとミルは述べてこの点にも注目する。ミルによればこれは洗練された考え方で、ヒンドゥー法の残酷さから程遠いが、他方ではムスリム法における最も残酷な刑罰は窃盗と強盗に関するものであり、この点ではヒンドゥー法と類似している。もう一つ、ムスリム法の欠陥としてミルが挙げたのが犯罪の分類方法であった。例えば盗んだのが羊であれ牛であれ同一の刑罰であるべきだが、ムスリム法では異なる刑罰を科すため法の数が無数になりかねない。執行手続きについては、ムスリム法はヒンドゥー法同様簡便であるとミルは指摘する。これは、インドでは裁判官の賄賂受領が認められているため、賄賂が禁じられているイギリスの様に手続きを複雑にして各段階で

手数料をとる必要がないからである。法廷でのカーディーとムフティーの分業、法廷の公開性の原則にも彼は言及する。彼によれば、証拠についてはムスリム法は概ねヨーロッパ法に劣っていないが、女性の証言を男性の証言に劣るとする点ではヨーロッパ法に劣る。但しムスリム社会では女性を知識や経験の取得から排除しているので、女性が教育を受けられる社会においてよりもこの規定の不適切性は少ないはずだと彼は考察する。総じてムスリム法における証拠についての法は、偽証を美德とする事もあるヒンドゥー法とは比べものにならぬほど優れている、というのがミルの評価であった。

宗教については、「マホメット教徒の優越性は宗教の点において全く議論の余地がない」。コーランの構成にはユダヤ教・キリスト教の聖典の知識が持ち込まれ、その事によって（コーランの）書き手は彼の精神的未開状態にもかかわらず大いに利益を得た様に思われる⁽⁸⁾、とミルは述べる。コーランにもばかばかしい点はあるが、そのばかばかしさはヒンドゥー聖典中のそれに比べれば少ない、というのが彼の意見であった【639】645】。

行動様式の点でも「マホメット教徒の優越性は極めて顕著であった」とミルは述べ、ムスリムの行動様式が人間の自然の平等に基づいていると高く評価する。ムスリムの方が儀式も簡素化されている。氣質の点ではヒンドゥーが奴隸的であるのに対し、ムスリムは荒く男性的な気性であるため「我々の半ば文明化された先祖」に似ており、イギリス人にとっては支配しにくい相手だとミルは評する。しかし道徳的性格についてはヒンドゥーもムスリムも不誠実で、他者

の感情に無関心であるという点では殆ど変わらない、と彼は論じた。

ミルによれば、芸術面ではムスリム征服者は完成度の高いペルシア芸術を持ち込み、特に建築ではヒンドゥーをはるかに凌駕し、ヨーロッパと遜色ない【645-647】。又ムスリムの間にはヒンドゥーに劣らぬ水準の科学が存在したとも彼は指摘する。詩については「マハーバーラタ」と「シャー・ナーメ」⁽³⁹⁾を比較すれば、後者の方が内容も現実的で全ての点で優っているが、ムスリムの優越性がとりわけ光るのは歴史叙述であるとミルは論じた。「我々の全ての知識は経験の上に立てられているので、未来の導きの為に過去を記録する事は叙述の技術の有用性が主に存するところの効果の一つである。この最も重要な文献の分野がヒンドゥーには完全に欠落しているのである。インドのマホメット教徒の間では、歴史を構成する技術がアジアの他のどの地域よりも高い完成度に極められてきた」【648】。この様にミルが歴史叙述に優れているムスリムをヒンドゥーに比べて高く評価した背景に、イギリスの経験論的思考の伝統に基づく価値判断があった事は注目されよう。

考察・結び

『英領インド史』におけるミルのインド理解は、俯瞰・比較による科学的・客観的分析をめざしながら西洋的観点からの主観的理解を免れぬものであった。具体的にはヒンドゥー教やヒンドゥー法典を生活様式を包括するものとは捉えず、一神教であり倫理規定が大

きな部分を占めるキリスト教、及びローマ法・英国法との対等な比較でその文明度を「測定」しようとするものであった。ヒンドゥーとムスリムの文明度を測る際に彼の参照基準となったのは、宗教における人間中心の倫理、社会的平等の概念（ジェンダーの平等を含む）、論理的な分類法及び定義、論理的整合性、合理性、有用性、そして「民主主義度」であった。それらこそが人類の普遍的發展過程に必ず現れるものとして彼の「文明度測定作業」の統一的物差しになったのであった。その統一的物差しは目に見えぬ情感や散文の価値を測る様にはできておらず、全てのものの有用性を数量化・点数化し、インドをはじめとするアジアの神秘のヴェールをはがし、屋台骨にしてヨーロッパの眼前にさらけ出した。ミルのこの精神は、欧米の民主主義国がアジア支配を深化させた際の自己正当化の論理を凝縮しており、後の「ウィルソン型外交」⁽⁴⁰⁾にも受け継がれた近代西欧知識人のアジア認識の祖型を提示している様に見える。

ミルがイスラーム文明を、ヨーロッパ文明よりは低いがヒンドゥー文明よりは高く評価したのも、イスラーム文明における平等概念や倫理性が西洋的価値観に合致していると考えたからであった。個人の精神が時代精神と無縁に展開し得ないとするなら、後のインド支配においてムスリムに特権を与えた英国の政策が、この様な文明的価値判断を内包する時代精神と全く無関係であったとは断言できない。又ミルの議論においては、同じムスリムでもアラブ人とイラン人への評価が高く、「専制的な」トルコ人への評価は目立って低い。この低評価が英米との深い関わりの中でオスマン帝国が解体

される百年後の政治的展開と符合するものも、時代精神との関わりを考えるなら全くの偶然であるとは言いい切れない。

この様に『英領インド史』においては専制への忌避、という要素が極めて注目されるのである。専制への忌避は、西欧で近代民主主義が萌芽し育っていく十七世紀以降の知識人の言説の中に顕著に見られる要素であるが、西欧で民主主義を育てたこの精神が、西欧人がアジアを見る際には文明論的・侮蔑的意味合いを帯びた事を同書は例証する。ミルは専制下で文明が育つはずはないので古代アジアに高度な文明が存在したはずはないと考えた。民主主義と文明を同一視するこの様な思考は後の「ウィルソン型外交」に流れ込み、今日まで米国外交を支配する思考の核となっている。但し中にはアダム・スミスの様に、民主主義と文明をかくも単純に同一視したり、決定論的にアジアを見る事をためらう知性が存在した事も心に留めるべきであろう。

ミルが他の集団を捨象してヒンドゥーとムスリムのみに住民を綺麗に二分するというインドの「再定義」を躊躇なく行っている事も、後に西欧諸国が住民の截然たる人為的分類を行いつつアジアを支配し、住民間に引かれた境界線が政治化して紛争（インド史では「コミューナル紛争」）に発展していく過程を予兆させる。俯瞰・住民の分類・「正確な比較」によって各集団の文明的な価値を項目ごとに列挙していくミルの精神は、サイードが十八世紀以降の近代オリエンタリズムの源流として指摘している精神であるが、その俯瞰・分類・比較の精神は、例えば英国の国内で民主主義を生み出す前提

となつた正にその精神でもあった事に注目したい。⁽¹²⁾ すなわち西欧諸国における民主主義の深化とアジア支配という二つの現象の同時進行は、偶然でも矛盾でもなく、両者が俯瞰・分類・比較という同一の時代精神から生まれた双子の現象であつたという事によって説明し得る事が、同書には示唆されているのである。

最後に、ミルの考察の土台となつたのは現地経験者の充分な「量」の証言であつた。証言が多ければ多い程正しい判断ができると彼は信じたが、最初の方で述べた様に偏見が混じつた証言である場合には、幾ら証言を集積しても偏見を強めるだけであり、その問題に自覚的でない事が彼の議論の欠陥であつたと言えよう。しかし今日の我々にとつて例えばミルが紹介する、前述の現地住民の公徳心と道徳の欠如についての西欧人の異口同音の告発は根も葉もない「偏見」なのか、それともやはり真実の一端なのかという疑問は残る。これらはそれなりの見識があると思われる実務家の証言で、量も多く内容も共通しており、ムガル帝国末期の政治の崩壊が生み出した現地社会の退廃ぶりを伝える生々しい内容を含んでいて容易には斥け得ないものがあるからである。しかし現地住民についての西欧人のこの種の証言を、例えばサイードは顧慮する事なく無視するか、或いは「オリエンタリズム」というカテゴリーに押し込めて一括処理してしまつた様に思われる。他方で植民地独立後、〈現地住民のあくどさ〉といった歴史像は植民地支配の被害者像としてはふさわしくないため、この種の証言は現地ナショナリズムの中で抹消され、敢えて光を当てられる事は少なかった。だが、オリエンタリズム的

偏見として片付けきれない、かつ植民地支配の「哀れな」被害者像とは矛盾する住民像を提示する、現地にとつては不都合とも言えるかなりの量の同時代証言を、脱植民地後の〈政治性を排したアジア研究〉の中でいかに解釈すべきか。こうした〈ポスト・オリエンタリズム〉の課題をも、ミルの議論は鋭く今日の我々に提起するのである。

註

- (1) James Mill, *The History of British India*, 3 Vols, London, 1817 (New York: Cambridge University Press, 2010). 本稿では J・S・ミルとの区別が明らか場合は単に「ミル」と記す事もある。また本稿で「英領インド」と訳したものは時期的に、英国が直接支配したインド帝国を指すものではない。なお Hindus の語は文脈によつては「ヒンドゥー人」とも言える様な民族に近いニュアンスのある用法でも使われているため、大半を「ヒンドゥー教徒」ではなく「ヒンドゥー」と訳す。
- (2) エドワード・サイード著、板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社、一九八八年、二二〇頁。
- (3) 森まり子「民主主義の『西欧的』起源について」『跡見学園女子大学文学部紀要』第五十六号、跡見学園女子大学、二〇二二年三月刊行予定。
- (4) E・H・カー著、原彬久訳『危機の二十年』岩波文庫、二〇一六年（原著一九三九年、六七～六九頁など）。ハンス・J・モーゲンソー著、星野昭吉・高木有訳『科学的人間と権力政治』作品社、二〇一八年（原著一九四六年、第三章など）。ウィルソン外交と十八世紀西欧の政治思想との関連について詳しくは、前註の拙稿を参照されたい。
- (5) 関嘉彦「ベンサムとミルの社会思想」、関嘉彦責任編集『ベンサム J・S・ミル』（世界の名著 49）所収、中央公論新社、一九九九年、二一・三七頁。
- (6) J・S・ミル著、朱牟田夏雄訳『ミル自伝』岩波文庫、一九六八年、九八～一〇一頁。
- (7) 同上書、一四二・一四五頁。
- (8) 同上書、三一・一七九頁。
- (9) 同上書、一七八～一七九頁。
- (10) 以下『英領インド史』第一巻の頁数を【3】の様に適宜示す。第一巻以外の巻の場合のみ【II 3】の様にローマ数字で巻数を記す。
- (11) 俯瞰・分類・比較について詳しくは前出の拙稿を参照。
- (12) 比較を行う際にミルが使用した世界の他の様々な地域に関する文献には次のものが含まれる（書誌情報は省略）。ギボン著『ローマ帝国衰亡史』、ヒューム著『英国史』、シャルダン著『ベルシア見聞記』、ケンペル著『日本誌』、バロウ『中国旅行』(Barrow, *Travels in China*)、インカ・ガルシラーソ・デ・ラ・ヴェーガ著『インカ皇統記』など。
- (13) 以下 *utility* の語は多用されている。「有用性」と訳す。
- (14) 以下引用文中の傍点は、断らない限り引用者が付したものである。
- (15) 世論の無謬性に関する J・ミルの言葉はカーが引用している。カー、前掲書、六四頁。多数者への同様の信頼はアリストテレスの『政治学』にも見られる。
- (16) サイード、前掲書、七八～七九頁。
- (17) 一七三二～一八一八。初代ベンガル総督（一七四四～八五）。ロヒラ戦争、第一次マラーター戦争、第二次マイソール戦争などの責任者として、インドにおける英国支配を推し進めた（柳澤悠執筆「ヘースティングズ」項、辛島昇ほか監修『南アジアを知る事典』平凡社、二〇二二年、七三二頁）。
- (18) 水島司「第八章 イギリス東インド会社のインド支配」、小谷汪之編『南アジア史 2』所収、山川出版社、二〇〇七年、三〇六～三〇頁。
- (19) William Jones, *Institute of Hindu Law: or, the Ordinances of Menu*,

Calcutta/London, 1796. Nathaniel Brassey Halhed, *A Code of Gentoo Laws, or, Ordinations of the pundits: from a Persian translation, made from the original written in the Sanskrit Language*, London, 1776.

(20) 水島、前掲論文、三二二頁。

(21) サイド、前掲書、二二・一二二～一二三・七六・七八頁。

(22) 一七二二～一七八二。英国による直接支配直前までマイソールを約二十年間にわたって支配したムスリム王。一七四九年マイソール王の下で義勇兵として活躍、一七六〇～八二年に実質上マイソール王国を支配し、ハイダラーバードのニザーム及びマラーターと対抗する。更に二度にわたって英軍の侵略に抗した(マイソール戦争)。(重松伸司執筆「ハイダラー・アリー」項、前掲『南アジアを知る事典』、五九五頁)。

(23) サクソンとゲルマンの「我々の祖先」は刑罰の穏健さ(死罪とせず罰金が多い)で最も突出しているが、窃盗の場合は彼らは非人道的であったとミルは述べている【150～151】。なおミル自身にも監獄改革の論考がある。J. Mill, "Prisons and Prison Discipline," 1823. Terence Ball ed., *James Mill: Political Writings*, Cambridge: Cambridge University Press, 1992, pp.197-224.

(24) 「すべての棘の中で最も罪深い、不正を働く金細工師を王は剃刀でばらばらに切断させるべし」(渡瀬信之訳注「マヌ法典」平凡社、二〇一三年、三四九頁)。

(25) 「親族および「自分の」資質を鼻にかけて夫を蔑ろにする「他の男と交わる」妻を、王は大勢の人の集まる場所で犬に噛みつかせるべし」「彼女と交わった」罪深い男を熱した鉄の寝台の上で焼かせるべし。薪が「寝台の」上に積み上げられ、その上で罪人は焼かれるべし」(同上書、二九九頁)。

(26) ここで「ミルは神明裁判は日本でも見られるとし、根拠資料としてケンベルの『日本誌』を挙げる【169】。

(27) シャルタン著『ベルシア見聞記』や、Barrow, *Travels in China* 等を参照して。

(28) ミルはヴィシユス神の第九の受肉かつ最後の顕現がブッダであると説明しており、仏教が東方で支配的になった経緯を説明している【223】。又コールブルクなどヨーロッパの学者の複数の文献をもとに、ヴィシユス神とシヴァ神をそれぞれ信じる人々が分派に分かれているとも記す【226註】。なお三つの神の中でヴィシユス神とシヴァ神に人気が集まり、ブラフマー神の位置づけが曖昧である事は今日の研究でも確認されている(上村勝彦執筆「ブラフマー」項、前掲『南アジアを知る事典』七〇六～七〇七頁)。

(29) ミルは、ギリシア・ローマ神話を寓話化する人々が非難され得るなら、ヒンドゥー神話を寓話化して無理に整合性を確保する事はおかしい、という趣旨の事を付け加えている【234～235】。

(30) ヒンドゥーの「訴訟好き」の性格についてもミルは個人的見解としてではなく、「ほぼ全ての証言者」が言っている事として提示している【310】。

(31) Charles Grant (一七四六～一八二三) はイギリス東インド会社で出世し、後に国会議員も務めた英国の政治家。

(32) これらの実務経験者の膨大な証言は、サイドの『オリエンタリズム』の中で取り上げられていない。

(33) 北欧の文明度に対するミルの評価は低いが、北欧神話と違ってヒンドゥーには合理的な倫理規定がないと彼は述べる【388】。つまりヨーロッパの中で水準が高くなかった北欧でさえ、ヒンドゥーよりは合理的な文化を持っていると示唆するのである。

(34) ミルは、トルコ人については「全般に洗練された人種ではない」と付言しており【390】、同じムスリムでもアラブ人やイラン人に比べて低く評価している。

(35) 天文学はまず興味を持ちやすいのと対象物の数が少ないので未開の人々が

最初に育みややすい分野だとスミスは述べている、とミルは記す【397～398】。
Adam Smith, "The History of Astronomy," *Essays on Philosophical Subjects*
(The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith,
III), Oxford: Clarendon Press, 1980.

(36) バロウの著作などである。

(37) ミルは実際にはこの様に直接的な表現はとらず、ニュアンスのある言い回しで婉曲に表現している。

(38) イスラームのヒンドゥー教に対する優越性の根拠としてユダヤ教・キリスト教聖典の影響の有無を挙げている点は偏見と言えようし、クルアーンに「書き手」を想定しているところも当時の典型的な偏見である。ムスリムはクルアーンをムハンマドの作品ではなく、神自身の言葉と見なしているからである。

(39) 作者のフィルダウスイー(九三五～一〇二五)はサーマーン朝、ガズナ朝期のペルシア詩人。特にガズナ朝は北インドにあり、ムガル帝国もペルシア語を行政・文化の言語としたところから、ミルは「シャール・ナーメ」をヒンドウスタンのムスリム征服者たちの間で生み出された文学作品【648】と捉えたのである。

(40) 他方、スカンディナヴィアやロシアの人々を、西欧人としてのミルが下に見ている事も注目される。

(41) 「以上述べてきた四つの要素——拡大、歴史的対決、共感、分類——が、近代オリエンタリズム特有の知的・制度的構造が拠って立つ十八世紀的思想の諸源流である。これから見てゆくところ、これらなくしてはオリエンタリズムは出現し得なかったであろう。……つまり近代のオリエンタリズムは、十八世紀ヨーロッパ文化のなかの、これら世俗化を促進する諸要素に由来するものだと言えるのである」(サイド、前掲書、一二三～一二四頁)。

(42) 詳しくは、森、前掲論文を参照。